



Title	アカン語における主語交替について
Author(s)	古閑, 恭子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2024, 35, p. 103-120
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/95323">https://doi.org/10.18910/95323</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## アカン語における主語交替について Subject Inversion in Akan

古閑 恭子\*  
KOGA Kyoko

### 0. はじめに

スワヒリ語では、ある種の状態を表すのに二つの構文が可能である（小森 1991, 小森 2013, 米田 2015, 米田 2016）。(1)は場所格倒置と呼ばれる現象である（例文(1)は米田 2015: 72 より）。(1.a)では、基本語順 SVO の主語位置に動詞の状態が見られる対象を表す「ライオン」が置かれ、主語接辞と一致する。(1.a)は「ライオン」が主題化されている場合にも用いられるし、中立叙述文としても用いられる。対して(1.b)場所格倒置構文では、「ライオン」が動詞の後ろに置かれ、場所を表す名詞句「森の中」が主題化されて文頭に置かれる。主語接辞は動詞の後ろに置かれた「ライオン」でなく文頭に置かれた場所格名詞句「森の中」と一致する<sup>1</sup>。場所格倒置構文において対象（この場合「ライオン」）は必須である（米田 2015）。(2), (3)は全体部分構文と呼ばれる。全体部分構文では、ヒトやモノが全体、身体部位やモノの一部（分泌物も含む）が部分として捉えられる。(2.a), (3.a)では部分が、(2.b), (3.b)では全体が、それぞれ文頭に置かれ、主語接辞はその要素に一致している（例文(2), (3)は小森 2013: 163, 164 より）。

- (1) a. Simba            wa-me-lala        msitu-ni.  
      ライオン PL2    SM2-PRF-寝る 森-LOC18  
      「ライオンが／は森の中で寝ている」
- b. Msitu-ni    m-me-lala        simba.  
      森-LOC18 SM18-PRF-寝る ライオン PL2  
      「森の中ではライオンが寝ている」
- (2) a. Koo        i-me-m-kauka        mtoto.  
      のど 9    SM9-PRF-OM3SG-渴く 子ども  
      「子どもはのどが渴いた」

\* 高知大学人文社会科学部教授（Faculty of Humanities and Social Sciences, Kochi University）

<sup>1</sup> スワヒリ語のグロス（Gloss）は小森(2013)、米田(2016)による。3SG: 3人称単数; F: 語尾; LOC: 場所接辞; OM: 目的語接辞; PL: 複数; PRF: 完了; PRS: 現在; SM: 主語接辞。名詞につく数字は名詞クラス、主語接辞、目的語接辞についた数字はその接辞が一致している名詞のクラスをそれぞれ表す。米田(2015, 2016)と小森(1991, 2013)のグロス（Gloss）は異なる部分もあるが、若干の統一にとどめた。

- b. Mtoto a-me-kauka koo.  
 子ども SM3SG-PRF-渴く のど  
 「子どもはのどが渴いた」
- (3) a. Maji ya-me-kauka mto-ni.  
 水6 SM6-PRF-乾く 川-LOC  
 「水が川から干上がった」
- b. Mto u-me-kauka maji.  
 川3 SM3-PRF-乾く 水  
 「川は水が干上がった」

どういった場合にこのような交替が起こるのか。こういった構文交替が可能な動詞は、出現、発生、存在、状態などを表す動作性の低い動詞に限られる。意味的には、動詞が表す状態変化を受けるのは対象の物体あるいは人の身体部分だが、それを含む容器や場所あるいは人もまた、その変化を受けると考えられる場合、構文交替が可能になるという（小森 2013）。情報構造の面では、スワヒリ語では語順や主語接辞との一致によって新情報や定性の度合いを表すという（米田 2015）。

アカン語（ニジェール・コンゴ語族クワ語派）でもこれと類似した現象がある。(4), (5), (6)はそれぞれ動詞をはさんで名詞句の位置が入れ替わっているが、ほぼ同じ意味を表す<sup>2</sup>。(4), (5)はスワヒリ語の全体部分構文と、(6)は場所格倒置構文と似ている。スワヒリ語と同様、a, bの違いは、どちらの名詞句が主題であるかの違いと考えられる。

- (4) a. Nsúó=nó fri-i bókiti=nó mú.  
 水=DEF 出る-PST バケツ=DEF 中  
 「水がバケツから出た」
- b. Bókiti=nó mú fri-i nsúó.  
 バケツ=DEF 中 出る-PST 水  
 「バケツは水が出た」
- (5) a. Nsúó f'ri ne=hwénémú.  
 水 出る.HAB 3SG.POSS=鼻の孔  
 「鼻水が彼の鼻から出る」
- b. Ne=hwénémú f'ri nsúó.  
 3SG.POSS=鼻の孔 出る.HAB 水  
 「彼の鼻は鼻水が出る」

<sup>2</sup> アカン語のグロスには以下の通り。1: 1 人称; 2: 2 人称; 3: 3 人称; DEF: 限定接語; HAB: 習慣辞; NEG: 否定辞; PL: 複数; POSS: 所有接語; PRF: 完了辞; PST: 過去辞; SG: 単数; STA: 状態辞。

- (6) a. Atéré wɔ ɛpónó=nó só.  
 スプーン ある.STA テーブル=DEF 上  
 「スプーンがテーブルの上にある」
- b. ɛpónó=nó só wɔ atéré.  
 テーブル=DEF 上 持つ.STA スプーン  
 「テーブルの上にはスプーンがある」

本稿では、こういったアカン語の構文交替（主語交替）<sup>3</sup>のデータを提示し、スワヒリ語との違いにも触れつつその特徴について述べる。

## 1. アカン語の構文交替

アカン語はガーナ共和国に話されるニジェール・コンゴ語族クワ語派に属する言語である。アサンテ、アクアペム、ファンテ、アノマボ・ファンテ、アブラ・ファンテ、アチェム、アゴナ、アセン、ダンチラ、クウ、ゴムア、アハフォ各方言に下位分類される(Eberhard, Simons, and Fennig 2020)。ここで対象とするのはアサンテ方言である<sup>4</sup>。

アカン語の基本語順はSVOで、代名詞以外は格標識がない。また、スワヒリ語のように名詞と動詞の文法関係を示すマーカーや一致もなく、名詞と動詞の文法関係はもっぱら語順で示される。動詞の多くは同形で自動詞にも他動詞にも使え、その場合自動詞用法の主語が他動詞用法の目的語に対応する。他動詞文(7.a)で主語は行為者で目的語は対象である。一方自動詞文(7.b)では対象が主語で、行為者は現れない。自動詞文では、自発的に変化が起こったことを表す。

- (7) a. Kofi bu-u pónó=nó.  
 コフィ 壊す-PST ドア=DEF  
 「コフィがドアを壊した」
- b. ɛpónó=nó bu-i.  
 ドア=DEF 壊す-PST  
 「ドアが壊れた」

一方、意味的には自動詞であるものに、類似した構文交替が起こる。(8), (9), (10) ((4), (5), (6)再掲) では動詞をはさんで名詞句の位置が入れ替わっているが、ほぼ同じ意味を表す。

<sup>3</sup> 小森(1991)では動詞の形が変わらないで主語が交替する現象としてまとめて「主語交替現象」と呼んでいる。

<sup>4</sup> データ収集に際して、アカン語アサンテ方言母語話者の Daniel Acheampong さん (30 歳代男性) と Samuel Amponsah さん (50 歳代男性) にご協力いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

(8), (9)はスワヒリ語の「全体部分構文」に、(10)は「場所格倒置構文」に類似する。

- (8) a. Nsúó=nó fri-i bókiti=nó mú.  
 水=DEF 出る-PST バケツ=DEF 中  
 「水がバケツから出た」
- b. Bókiti=nó mú fri-i nsúó.  
 バケツ=DEF 中 出る-PST 水  
 「バケツは水が出た」
- (9) a. Nsúó fri ne=hwénémú.  
 水 出る.HAB 3SG.POSS=鼻の孔  
 「鼻水が彼の鼻から出る」
- b. Ne=hwénémú fri nsúó.  
 3SG.POSS=鼻の孔 出る.HAB 水  
 「彼の鼻は鼻水が出る」
- (10) a. Atéré wə epónó=nó só.  
 スプーン ある.STA テーブル=DEF 上  
 「スプーンがテーブルの上にある」
- b. Epónó=nó só wə atéré.  
 テーブル=DEF 上 持つ.STA スプーン  
 「テーブルの上にはスプーンがある」

以下では、アカン語の(8), (9)のような全体部分に関わる構文交替および(10)のような場所状態に関わる構文交替のデータを提示し、その特徴について述べる。アカン語においてもこうした構文交替は自然発生的状態変化を表す動詞に起こるが、スワヒリ語と比べるとアカン語の構文交替はさらに状態性の高い動詞に限られ、もっとも構文交替が起こりやすいのは、所有・存在表現である。意味的にも、スワヒリ語と同様に位置が入れ替わる名詞句が状態変化する物質・物体およびその状態変化が起こる場所の関係であり、状態変化が両方の名詞句に及んでいると捉えられるとき、あるいは所有者と被所有物との関係であると同時に存在物と存在場所の関係でもあるとみなされるとき、交替が可能になると考えられる。

## 2. 全体部分に関わる交替

アカン語においても、スワヒリ語の全体部分構文と同様の現象が見られる。この現象が見られる動詞は、動作性の低い動詞の中でも自然発生的ないし生理的状态変化を表す動詞に限られる。状態変化する部分と、その状態変化が起こる全体を表す名詞句の間で交替が

起こる。スワヒリ語では、(11)のように全体がヒトの場合の全体部分構文では動詞の後ろの部分の要素は必須であるが、全体がモノの場合には、(12)のように動詞の後ろに部分の要素がなくても文は成り立つ（米田 2016. 例文(11), (12)は米田 2016 より）。アカン語の場合、(13), (14)のように全体がモノであれヒトであれ、両方の要素が原則必須である。

- (11) a. Mtoto a-me-vunjik-a mguu.  
 子ども 1 SM1-PRS-折る-F 脚 3  
 「子どもは脚が折れている」  
 b. \*Mtoto a-me-vunjik-a.  
 子ども 1 SM1-PRS-折る-F
- (12) a. Kiti ki-me-vunjik-a mguu.  
 椅子 7 SM7-PRS-折る-F 脚 3  
 「椅子は脚が折れている」  
 b. Kiti ki-me-vunjik-a.  
 椅子 7 SM7-PRS-折る-F  
 「椅子が/は折れている(=壊れている)」
- (13) a. Bókiti=nó mú fri-i nsúó.  
 バケツ=DEF 中 出る-PST 水  
 「バケツは水が出た」  
 b. \*Bókiti=nó mú fri-i.  
 バケツ=DEF 中 出る-PST
- (14) a. Ne=hwénémú fri nsúó.  
 3SG.POSS=鼻の孔 出る.HAB 水  
 「彼は鼻水が出る」  
 b. \*Ne=hwénémú fri.  
 3SG.POSS=鼻の孔 出る.HAB

またスワヒリ語では、全体部分構文のうち、モノの状態文では意味的な制限は見られませんが、ヒトの状態文では譲渡不可能な所有物でなければならないという制限がある（小森 1991, 米田 2016）。アカン語では、モノもヒトもさらに内容物、分泌物に限られる。例えば、スワヒリ語の(11.a), (12.a)のような全体部分構文はアカン語では見られない。アカン語では(15.a), (16.a)のように部分を全体から切り離さずに表現する。

- (15) a. Abofrá=yí nán mú á-!bú.  
 子ども=この 脚 中 PRF-折る  
 「子どもの脚が折れている」
- b. \*Enán mú á-!bú abofrá=yí.  
 脚 中 PRF-折る 子ども=この
- (16) a. Akonwá=yí nán á-!bú.  
 椅子=この 脚 PRF-折る  
 「この椅子の脚が折れている」
- b. \*Akonwá=yí á-!bú nán.  
 椅子=この PRF-折る 脚

## 2.1. モノの全体部分に関わる交替

モノの全体部分に関わる交替が見られる動詞として、発散、増減を表す以下の動詞が見つまっている。

fri 「出る」、fiti 「漏れる」、we 「干上がる」

いずれも自然発生的な状態変化を表す動詞で、発散、増減する物質を表す名詞句と、そういったことが起こるモノ全体を表す名詞句との間で交替が起こる。以下、a, b どちらの構文においても、原則として両方の名詞句が必須である。

- (17) a. Nsúó=nó fri-i bókiti=nó mú.  
 水=DEF 出る-PST バケツ=DEF 中  
 「水がバケツから出た」
- b. Bókiti=nó mú fri-i nsúó.  
 バケツ=DEF 中 出る-PST 水  
 「バケツは水が出た」
- (18) a. Nsúó=nó fiti bókiti=nó.  
 水=DEF 漏れる.HAB バケツ=DEF  
 「水がバケツから漏れる」
- b. Bókiti=nó fiti nsúó.  
 バケツ=DEF 漏れる.HAB 水  
 「バケツは水が漏れる」
- (19) a. Nsúó á-!wé tadéé=nó mú.  
 水 PRF-干上がる 池=DEF 中  
 「水が池の中で干上がった」

- b. Otadéé=nó mú á-!wé nsúó.  
池=DEF 中 PRF-干上がる 水  
「池の中は水が干上がった」

同じく減少を表す *sã* 「(使い果たして) なくなる/使い果たす」、*hwan* 「減る/減らす」は、(20.a, b), (21.a, b)のように使役交替は可能だが、(20.c), (21.c)のように減少する物質を表す名詞句と減少が起こる全体を表す名詞句の入れ替えはできない。自然な現象ではなく使い果たしたり減らしたりする行為者が必須であるためだと考えられる<sup>5</sup>。一方、(22)のようにスワヒリ語ではこうした場合の交替が可能なのである(例文(22)は小森 2013: 162 より)。

- (20) a. Kofi á-!sá ínki=nó.  
コフィ PRF-使い果たす インク=DEF  
「コフィはインクを使い果たした」
- b. Ínki=nó á-!sá (pén=nó mú).  
インク=DEF PRF-尽きる ペン=DEF 中  
「(ペンの中で) インクがなくなった」
- c. \*Pén=nó mú á-!sá ínki=nó.  
ペン=DEF 中 PRF-尽きる インク=DEF
- (21) a. Kofi hwan-n nsúó=nó só.  
コフィ 減らす-PST 水=DEF 上  
「コフィは水を減らした」
- b. Nsúó=nó só hwan-n (bókíti=nó mú).  
水=DEF 上 減る-PST バケツ=DEF 中  
「(バケツの中で) 水が減った」
- c. \*Bókíti=nó mú hwan-n nsúó=nó só.  
バケツ=DEF 中 減る-PST 水=DEF 上
- (22) a. Wino u-me-kw-isha kenye kalamu hii.  
インク 11 SM11-PRF-INF-尽きる ~に ペン この  
「インクがこのペンから無くなった」

<sup>5</sup> ただインフォーマントに確認したところ、(21.b)は自然発生的な現象を表す(バケツからの漏れ、蒸発)のが一般的な捉え方である。このことについてはさらに調査が必要だが、他動性の程度が関係しているのではないかと考えられる。

- b. Kalamu hii i-me-kw-isha wino.  
 ペン 9 この 9 SM9-PRF-INF-尽きる インク  
 「このペンはインクがなくなった」

## 2.2. ヒトの全体部分に関わる交替

ヒトの全体部分に関わる交替が見られる動詞として、発散、詰まり、増減を表す以下のような動詞が見ついている。

fri 「出る」、te 「流れる」、bon 「臭う」、yi 「(臭いが) 出る」、tu 「(臭いが) 出る」、do 「増える」、hini 「詰まる」

いずれも自然発生的な状態変化を表す動詞であり、発散したり増えたり減ったりする物質を表す名詞句と、そういったことが起こるヒト（の身体部位）を表す名詞句との間で交替が起こる。スワヒリ語と同じく譲渡不可能な所有物の変化だが、2.冒頭で述べたように、スワヒリ語と異なり分泌物に限られる。以下、a, b どちらの構文においても、原則として両方の名詞句が必須である。

- (23) a. Mó!gyá fri ne=hwénémú.  
 血 出る.HAB 3SG.POSS=鼻の孔  
 「鼻血が彼から出る」
- b. Ne=hwénémú fri mó!gyá.  
 3SG.POSS=鼻の孔 出る.HAB 血  
 「彼は鼻血が出る」
- (24) a. Mfi!firé á-te Kofi.  
 汗 PRF-流れる コフィ  
 「汗がコフィから流れた」
- b. Kofi á-te mfi!firé.  
 コフィ PRF-流れる 汗  
 「コフィは汗が流れた」
- (25) a. Dwón!só bon beé!má=nó hó.  
 小便 臭う.STA 男=DEF 体  
 「小便がその男から臭う」
- b. Obeé!má=nó hó bon dwón!só.  
 男=DEF 体 臭う.STA 小便  
 「その男は小便の臭いがする」

- (26) a. Ehwá yí ne=hó.  
臭い 出る.HAB 3SG.POSS=体  
「臭いが彼から出る」
- b. Ne=hó yí !hwá.  
3SG.POSS=体 出る.HAB 臭い  
「彼は臭う」
- (27) a. Nká tú ne=hó.  
臭い 出る.HAB 3SG.POSS=体  
「臭いが彼から出る」
- b. Ne=hó tú n!ká.  
3SG.POSS=体 出る.HAB 臭い  
「彼は臭う」
- (28) a. Saadée á-do=no.  
脂肪 PRF-増える=3SG  
「脂肪が彼に増えた」
- b. O=a-dó saadée.  
3SG=PRF-増える 脂肪  
「彼は脂肪が増えた」

例外的に(29)は譲渡不可能な所有物でない。この場合、のどに詰まっている「フフ」が「コフィ」と一体化したものと捉えていると考えられる。

- (29) a. Fufú á-hini Kofí.  
フフ PRF-詰まる コフィ  
「フフがコフィ (ののど) に詰まった」
- b. Kofí á-hini fufú.  
コフィ PRF-詰まる フフ  
「コフィはフフが (のどに) 詰まった」

### 3. 場所状態に関わる交替

アカン語において、最も構文交替が起こりやすいのは、場所状態に関わる動詞である。場所状態に関わる構文交替は、ある状態にある物質・物体を表す名詞句とそれが存在する場所を表す名詞句との間で起こる。意味的にスワヒリ語の「場所格倒置」と似ており、スワヒリ語も動作性の低い動詞に限られるが、アカン語はさらに状態性が高い存在、所有、保持等を表す場合にしか交替できない。例えばスワヒリ語の(30)のような構文交替はアカ

ン語では不可である(31) (例文(30)は米田 2016 より)。

- (30) a. Kikombe ki-me-vunjika juu ya meza.  
 コップ7 SM7-PRF-割れる 机の上16  
 「コップが机の上で割れている」
- b. Juu ya meza pa-me-vunjika kikombe.  
 机の上16 SM16-PRF-割れる コップ7  
 「机の上ではコップが割れている」
- (31) a. Kúru!wá=bí á-bu wɔ pónó=nó so.  
 コップ=或る PRF-割れる ある.STA 机=DEF 上  
 「コップが机の上で割れている」
- b. \*Épónó=nó só á-!bú kúru!wá=nó.  
 机=或る 上 PRF-割れる コップ=DEF

### 3.1. 所有・存在に関わる交替

場所状態に関わる交替の中でも最も顕著に起こるのは、所有・存在に関わる交替である。所有・存在を表す動詞 wɔ 「持つ／ある」を使った構文は基本的に構文交替することができる。wɔ は所有表現にも存在表現にも使われ、所有者 wɔ 被所有物 の構文を「所有文」、存在物 wɔ 場所 の構文を「存在文」と呼ぶことにする。存在するあるいは所有される人・動物・物などを表す名詞句と存在する場所あるいは所有者を表す名詞句との間で交替が起こる。

#### 3.1.1. 所有者・存在場所が有生の場合

所有者・存在場所が有生の場合所有文が自然であるが、概ね存在文への交替が可能である。以下、a, b どちらの構文においても両方の名詞句が必須である。存在物が所有者と一体的である場合、存在文では具体的な身体部位が示されなくてはならない。

- (32) a. ɔ=wɔ abɔdwesé.  
 3SG=持つ.STA 髭  
 「彼は髭を持つ」
- b. Abɔdwesé wɔ ne=hó.  
 髭 ある.STA 3SG.POSS=体  
 「髭が彼にある」

- (33) a. ɔ=wo           síká.  
3SG=持つ.STA お金  
「彼はお金を持っている」
- b. Síká wo           ne=hó.  
お金 ある.STA 3SG.POSS=体  
「お金は彼が持っている (身につけている)」
- (34) a. Me=wo           adwen pá.  
1SG=持つ.STA 考え 良い  
「私は良い考えがある」
- b. Adwen pá wo           mi=tírí           mú.  
考え 良い ある.STA 1SG.POSS=頭 中  
「良い考えが私にある」
- (35) a. ɔ=wo           adómákyedéé.  
3SG=持つ.STA 贈り物  
「彼には才能がある」
- b. Adómákyedéé wo           ne=só.  
贈り物 ある.STA 3SG.POSS=上  
「才能が彼にある」
- (36) a. ɔ=wo           yaréé.  
3SG=持つ.STA 病気  
「彼は病気を持つ」
- b. Yaréé wo           ne=hó.  
病気 ある.STA 3SG.POSS=体  
「病気が彼にある」
- (37) a. ɔsebó hó wo           nwií.  
ヒョウ 体 持つ.STA 毛  
「ヒョウには毛がある」
- b. Nnwií wo           ɔsebó hó.  
毛 ある.STA ヒョウ 体  
「毛がヒョウにある」

3.の冒頭で述べたように、行為の結果としての存在を表す場合、構文交替は不可能である。

- (38) a. ɔ=a-gyé                      siká.  
           3SG=PRF-受け取る    お金  
           「彼はお金を受け取った」
- b. \*Siká á-gye                      ne=hó.  
           お金    PRF-受け取る    3SG.POSS=体
- (39) a. ɔ=a-nyá                      siká.  
           3SG=PRF-手に入れる    お金  
           「彼はお金を手に入れた」
- b. \*Siká á-lnyá                      ne=hó.  
           お金    PRF-手に入れる    3SG.POSS=体

人間、動物、身につけない物など所有物が所有者と一体的でない場合、存在文でも身体部位が示されない。またその場合、所有文では被所有物は不定でも定でもいけるが、存在文では存在物が定でなければならず（場所新情報）、所有文と意味的違いが生じる。ただし所有文(43.a)で限定接語がつく形は、自分の子どもでない場合は言えるが、自分の子どもとしては不可である。

- (40) a. ɔ=wɔ                      siká(=nó).  
           3SG=持つ.STA    お金=DEF  
           「彼は（その）お金を持っている」
- b. Siká=nó    wɔ=no.  
           お金=DEF    ある.STA=3SG  
           「そのお金は彼のだ」
- (41) a. Wó=wɔ                      tweré!dúá(=nó)?  
           2SG=持つ.STA    鉛筆=DEF  
           「あなたは（その）鉛筆を持っているか？」
- b. Tweré!dúá=nó wɔ=wɔ?  
           鉛筆=DEF    ある.STA=2SG  
           「その鉛筆はあなたのか？」
- (42) a. ɔ=wɔ                      fié(=nó).  
           3SG=持つ.STA    家=DEF  
           「彼は（その）家を所有している」
- b. Efié=nó    wɔ=no.  
           家=DEF    ある.STA=3SG  
           「その家は彼が所有している」

- (43) a. ɔ=wo bá(\*=nó).  
 3SG=持つ.STA 子ども  
 「彼は子どもがある」
- b. ɔbá=no wo=no.  
 子ども=DEF ある=3SG  
 「その子は彼にある (彼の子だ)」

### 3.1.2. 所有者・存在場所が無生の場合の交替

存在場所・所有者が無生の場合は、存在物・被所有物が有生であれ無生であれ存在文が自然だが、所有文と存在文の交替が可能である。以下、a, b どちらの構文においても両方の名詞句が必須である。

- (44) a. Anomnómdéé=no mú wo nsá.  
 飲み物=DEF 中 持つ.STA アルコール  
 「その飲み物にはアルコールが入っている」
- b. Nsá wo anomnómdéé=no mú.  
 アルコール ある.STA 飲み物=DEF 中  
 「アルコールがその飲み物に入っている」
- (45) a. Abótánbébrée wo há.  
 石 多くの ある.STA ここ  
 「石はここに多い」
- b. Ahá wo abótánbébrée.  
 ここ 持つ.STA 石 多くの  
 「ここは石が多い」
- (46) a. Nsúo bébrée wo há.  
 雨 多くの ある.STA ここ  
 「雨はここに多い」
- b. Ahá wo nsúo bébrée.  
 ここ 持つ.STA 雨 多くの  
 「ここは雨が多い」
- (47) a. Nkonwá (meensá) wo dán=no mú.  
 椅子 3 ある.STA 部屋=DEF 中  
 「椅子が (3つ) その部屋にある」

- b. Edán=nó mú wɔ nkonwá (meensá).  
 部屋=DEF 中 持つ.STA 椅子 3  
 「その部屋は椅子が (3つ) ある」

スワヒリ語の場所格倒置構文では、対象は不定名詞でなければならない。つまり、(48.b)の「ライオン」は不特定のライオンでなければならない(米田 2015. 例文(48)は(1)再掲)。

- (48) a. Simba wa-me-lala msitu-ni.  
 ライオン PL2 SM2-PRF-寝る 森-LOC18  
 「ライオンが／は森の中で寝ている」
- b. Msitu-ni m-me-lala simba.  
 森-LOC18 SM18-PRF-寝る ライオン PL2  
 「森の中ではライオンが寝ている」

アカン語において、(49)のように「スプーン」については定であれば所有文は不可であり、スワヒリ語の場所格倒置文において対象が不定でなければならないことと並行するが、「ライオン」であれば(50)のように限定接語をつけて構文交替が可能である<sup>6</sup>。

- (49) a. Atéré(=nó) wɔ epónó=nó só.  
 スプーン=DEF ある.STA テーブル=DEF 上  
 「(その) スプーンがテーブルの上にある」
- b. Epónó=nó só wɔ atéré(\*=nó).  
 テーブル=DEF 上 持つ.STA スプーン=DEF  
 「テーブルの上にスプーンがある」
- (50) a. Gyatá=nó wɔ kwá!yé=nó mú.  
 ライオン=DEF いる 森=DEF 中  
 「そのライオンは森の中にいる」
- b. Kwá!yé=nó mú wɔ gyatá=nó.  
 森=DEF 中 いる ライオン=DEF  
 「森の中にそのライオンがいる」

スワヒリ語においては(51)のような出来事の生起の場所格倒置構文が示されている(例

<sup>6</sup> ただし(50.a)では特定の1匹のライオンだが、(50.b)では特定の1匹もしくは複数のライオンでも良い。また存在するのが「ニワトリ」の場合は不可能だという。存在する対象の話題になりやすさが関係するようだ。

文(51)は米田 2016 より)。

- (51) a. Maafa ya-li-toke-a chumba-ni.  
惨事 6 SM8-PRF-起きる-F 部屋-LOC17  
「惨事は部屋の中で起きた」
- b. Chumba-ni ku-li-toke-a maafa.  
部屋-LOC17 SM17-PST-起きる-F 惨事 6  
「部屋の中は惨事が起きた」

アカン語では出来事の生起については構文交替はできないが(52)、(53)のように存在として捉える場合には交替ができる。

- (52) a. Egyá tɔ-ɔ yɛn=súkúu mú nnó!rá.  
火事 落ちる-PST 2PL.POSS=学校 中 昨日  
「昨日、学校で火事が起きた」
- b. \*Yɛn=súkúu mú tɔ-ɔ egyá nnó!rá.  
2PL.POSS=学校 中 落ちる-PST 火事 昨日
- (53) a. Ná egya hyé!hyéé wɔ yɛn=súkúu mú nnó!rá.  
その時 火事 熱い ある.STA 2PL.POSS=学校中 昨日  
「昨日、火事が学校であった」
- b. Ná yɛn=súkúu mú wɔ egya hyé!hyéé nnó!rá.  
その時 2PL.POSS=学校中 持つ.STA 火事 熱い 昨日  
「昨日、学校で火事があった」

### 3.2. 保持・着用に関わる交替

所有・存在に関わる交替と似たものとして、保持・着用に関わる交替が見ついている。保持、着用に関わる交替が見られる動詞として、以下が見ついている。

kita 「(手に) 持つ」、kura 「(手に) 持つ」、fua 「(手に) 持つ」、sõ 「(頭に) 載せる」、soa 「(頭に) 載せる」、hyɛ 「着る」、fura 「まとう」、bo 「(スカーフを) 巻く」

保持、着用される物体を表す名詞句と保持、着用する人を表す名詞句との間で交替が起こる。以下、a, b どちらの構文においても、両方の名詞句が必須である。

- (54) a. Kofi kita siká.  
コフィ 持つ.STA お金  
「コフィはお金を持っている」

- b. Siká kita Kofi.  
 お金 持つ.STA コフィ  
 「お金はコフィが持っている」
- (55) a. Kofi kura siká.  
 コフィ 持つ.STA お金  
 「コフィはお金を持っている」
- b. Siká kura Kofi.  
 お金 持つ.STA コフィ  
 「お金はコフィが持っている」
- (56) a. O=fua pé!á.  
 3SG=持つ.STA 槍  
 「彼は槍を持っている」
- b. Pé!á fua=no.  
 槍 持つ.STA=3SG  
 「槍は彼が持っている」
- (57) a. O=sō adésóá.  
 3SG=載せる.STA 荷物  
 「彼は重荷を背負っている」
- b. Adésóá sō=no.  
 荷物 載せる.STA=3SB  
 「重荷は彼が背負っている」
- (58) a. O=soá bōdédé.  
 3SG=載せる.HAB プランテーン  
 「彼女はプランテーンを頭に載せる」
- b. Bōdédé soá=nó.  
 プランテーン 載せる.HAB=3SG  
 「プランテーンは彼女が頭に載せる」
- (59) a. O=hyε ataade fúfúó.  
 3SG=着る 服 白い  
 「彼は白い服を着ている」
- b. Ataade fúfúó hyε=no.  
 服 白い 着る=3SG  
 「白い服は彼が着ている」

- (60) a. O=furá                      ntomá.  
           3SG=まとう.HAB    布  
           「彼は布をまとう」
- b. Ntomá    furá=no.  
           布            まとう.HAB=3SG  
           「布は彼がまとう」
- (61) a. O=bó                        dúku.  
           3SG=巻く.HAB    スカーフ  
           「彼女はスカーフを巻く」
- b. Dúku            bó=no.  
           スカーフ    巻く.HAB=3SG  
           「スカーフは彼女が巻く」

#### 4. まとめ

本稿では、スワヒリ語の「全体部分構文」「場所格倒置構文」に類似した、アカン語に見られる構文交替を提示した。アカン語においてもこうした構文交替は、自然発生的ないし生理的状态あるいは状態変化を表す動詞に起こり、意味的にも、スワヒリ語と同様に、位置が入れ替わる名詞句が状態変化する物質・物体およびその状態変化が起こるヒト、モノの関係であり、状態変化が両方の名詞句に及んでいると捉えられるとき、あるいは所有者と被所有物との関係であると同時に存在物と存在場所の関係でもあるとみなされるとき、交替が可能になると考えられる。

スワヒリ語と比べると、アカン語の構文交替はさらに状態性の高い動詞に限られ、もっとも構文交替が起こりやすいのは、所有・存在表現である。全体部分に関わる交替で、モノもヒトも状態変化するのは内容物、分泌物に限られること、また本稿で取り上げたすべての例文で原則として位置が入れ替わる両方の名詞句が必須であることも、スワヒリ語と異なる点である。

所有・存在に関わる構文交替では、所有物が所有者と一体的でない場合、所有文では被所有物が定・不定でもいけるが、存在文では存在物が定でなければならない。また存在場所が無生で存在物が定である場合、所有文は不可となる。これはスワヒリ語の場所格倒置文で対象が不定でなければならないことと並行する。さらなる調査が必要だが、アカン語の構文交替にも情報構造が強く関わっていると考えられる。

なお、本稿では取り上げなかったが、感情変化を表す動詞文でも構文交替が確認されている（感情変化の経験者（の身体部位）を表す名詞句と、感情変化をもたらす原因を表す名詞句の位置が入れ替わる）。これについては今後詳しく調べていきたい。

## 参考文献

- Eberhard, D.M., G.F. Simons, and C.D. Fennig eds. (2020) *Ethnologue: Languages of Africa and Europe, Twenty-third edition*, Dallas, Texas: SIL International.
- 小森淳子 (1991) 「スワヒリ語に見られる主語交替現象について」『言語学研究』 10, pp.1-22.
- 小森淳子 (2013) 「スワヒリ語のいわゆる「壁塗り交替」構文について」『スワヒリ&アフリカ研究』 24, pp. 159-170.
- 米田信子 (2015) 「スワヒリ語の場所格の主題化」『日本語学』 34(12), pp.68-76.
- 米田信子 (2016) 「スワヒリ語における「～ハ～ガ」構文および類似した構文」『スワヒリ&アフリカ研究』 27, pp.17-36.